西洋雜誌

毎月刊行　巻一

江戸　開物社

西垣文庫
文庫10
7315
1

特 文庫10
7315
1

西須文庫

西洋雜誌

西洋諸國ニハ新聞紙局あまた。公私の報告。市井の風説を集め。或ハ毎月。或ハ毎七日。或ハ毎日これを印行しく。互ニ新報を得るを競ふ。就中英吉利の如きハ新聞局の数六十有餘あまた。万國ニ勝まて最盛なりと云。又諸学科の社中ニも。毎月出版の叢書ありまた。新發明の説を泄さゞ集録し。速ニ同社ニ傳

市井図書館

市井図書館

ふるを以て。学術の日々に開くる変極めて速なり。吾等窃に其例にならひ。諸学科の新説ハさらなり。日用便宜の方法等を集めて。海内の同好に領ちんと欲す。今先ッ二三友人の譯稿を抄出して嚆矢とす。希くハ博雅君子吾等の志を襄成せよ。

慶應三年 冬十月

楊江柳河暾識

富三

西洋雜誌卷一

西洋諸國近代盛衰の大略

去る安政五年以来。今年に至るまで。條約を渝る通信の國。十一ヶ國なり。すなはち

オロシヤ國　フランス國　アメリカ合衆國

イギリス國　オランダ國

右五ヶ國ハ安政五年。條約渝

ポルトガル國　プロイセン國　デヂマルカ國
スヰッス國　ベルギー國　イタリヤ國
いづれもエウロッパ洲ニ在り
右六ケ國ハ其後引續き追ヒ條約ヲ成シタル
國なり。唐國ハ通商有ル支最久しといへども。
近來改めて條約ハ無之。右十一ケ國の外なり。
此外西洋にて有名の國ハ。オーストリヤ國。イス
パニヤ國。スエーデン國。トルコ國。ゼルメン列國三

十餘國。ギリシヤ國。アフリカ洲にてエジプト國。
アジア洲の安南國。暹羅國。ビルマ國。ハルシヤ國。
アラビヤ國。アメリカ洲のメキシコ國。ブラシル國。
ペーリュー。ボリヒヤ。チリ。ラプラタ等の合衆諸國。
其他なほ多の國々ありといへども。先づ是等の國
の盛衰のありさまを知る事。何の學科を
學ぶにも。又通商交易をなすにも要用なる
故なり。西洋歴史并に地理書の内より。各國

帝王の年代。或ハ近世の治乱興亡を抄出し。甚大略を記し。もとより雑記の事なれば。前後の次第も。詳略も一様なすべし。看者これを怪むことなかれ

オロシヤ國帝の系図

ミカエル・ロマノウ　慶長年中國王となる
正保二年没

アレキシス　正保二年より延宝四年まで

ヘオドル才二　延宝四より天和二まで

女イワン才五　天和二より元禄二まで

ペートル大帝　元禄二より享保十まで

后カタリナ　享保十より享保十二まで

アレキシス　早世

ペートル才二　享保十二より享保十五まで

女カタリナ
メクレンビュルグ侯カーレル・レオポルドに嫁す

女アンナ　享保十五より元文五まで

女アンナ
ヨルヘンビュルグ侯アントン・ウルリキに嫁す

女イワン才六　元文五年立。ほどなく廢せらる

女アンナ
ホルステイン・ゴットルプ侯カーレル・フレデリキに嫁す

女エリサベット　寛保元より宝暦十二まで

ペートル才三　宝暦十二より十三まで

右カタリナ才二　宝暦十三より寛政八まで

ポウル才一　寛政八より享和元まで

アレキサンドル才一　享和元より文政八まで

コンスタンテイン　位を嗣ぐべ天保三年没

ニコラース才一　文政八より安政二まで

アレキサンドル才二　安政二年位を嗣ぐ
即ち今の國帝なり

文禄慶長の頃。オロシヤ國大に乱れて。隣國に
攻られ。衰微せり。ミカエル王の代に至りて。
國政を改革し。アレキシス王の代に兵制を
改め。強大の國となる。ペートルの代に至りては。
自ら和蘭英吉利等の諸國を周遊し。造
船航海の學を傳習し。交易の路を通し。富国強
兵の術を尽し。民に礼義を教へ。城郭を築き。不
毛の地を開きなどして。一代の成功なげく數
へ難し。此ペートルの代に遷して都をペートルス
ブルグと云ふ。此代より帝号を称し全世界中
第一の大國となる。ペートル帝没して后カタリナ
國政を握る。支二年。此后も亦英邦の女主に
して國勢を墜さず。然るにカタリナいまだ先

帝の后妃となりざるまゝ前。大臣メンシコフと
いふ者の侍妾なりしに故に。帝の没後。復メンシコ
フと相通じ。后没しゝ後。ペートル帝の孫ペートル
第二。位を嗣ぐ。ペートル第二の父アレキスも是
より先に。父帝の意に忤ひて誅せられしも。却
メンシコフも獨り國政を擅にせしのみも程無
く貶竄せられゝシベリヤの地に終りぬ。ペートル
第二没しゝ女主アンナ位を嗣く。此時代より

たびゝトルコと國境の地を争ひて戦争なり。
オロシヤ方。利を得ること度々。國勢益盛
なり。其後アレキサンドル第一の世に至りて。フラン
ス帝ナポレオン第一。大軍を以て攻寄せれ共。
終に敗北して帰きぬ。ポーレンも元来オロシヤ
の隣國なれども。昔ハオロシヤ國と争ひ競ひ一程
の勢なりしも。後来次第に衰へて。漸くオロシヤ
に蠶食せられ。オロシヤ帝ニコラースの代天保

三年以来。全くオロシヤの領地となりて。ポーレンの都ワルサウ〻地は。オロシヤより代官を置き〻治むる事となりぬ。嘉永六年トルコ國と戦争まで起る。イギリス。フランスの両國もトルコを援(タス)け。互に勝敗なき。此戦のいまだ終(ヲハ)らざる間に。ニコラース帝没せ〻ば。其子アレキサンドル茅二位を嗣ぐ。此代となりて。安政三年。英佛トルコの三ケ國と。オロシヤ國との和議整ひ。フランスの都なるパリに於て會盟ありて。文久三年ポーレンの地に一揆起りて騒動ありしが。是も程なくしづまりぬ。扨オロシヤ國の使節始めて日本に来りしは。文化元年〻〻アレキサンドル茅一の代なり。此時通信通商を許されずして空く帰國し。然るに文化三年オロシヤ人蝦夷地を乱妨せ〻る事ありて。日本〻〻はオロシヤを仇敵の如く思ひ。其後

オロシヤ人ゴロウニンといふ者。偶日本に来りしを。彼乱妨人の同類なりんと。疑ひこゝにて。獄に繋ぎて糺明あるべし。終にゆるされて帰國を得たり。それより三十餘年を経て。ニコラース帝の代に。布帖廷(フテチン)といふ者を使節として日本に差越したりけり。両國の交際をもとめて開け。互に往来する事となり

○國を富ますには先づ學術を開くべきの論

古の學士ロビケッド曰。此地球には無數の珍宝ありて。取るとも尽る事無く。随て用ゐれば随て生ず。此理常人の能く知る所にあらず。只博學多智の人のみ之を了解すべしと云へり。

蓋し財は一人の財にあらず。天下通用の財なり。物産は一國一邑の物にあらず。萬國共用れ

物なり。故に有を以て無に換る。互市通商の法は自然に天理に合へり。然れども只自然に任まるのみにて。人力を尽さず無ければ。之を取て足らざる時あり。之を用ひ竭る時あり。故に金石を採錬し。草木を培養し。酒を釀し。塩を煎じ。糖を製し。蠶を養ひ。布帛を織り。紙を漉き。油を搾り。蠟燭を造る等を初めとして。悉く人工を假るにあらざれば。物産を充足せしむる事

あらざれば。物産充足せざれば國を富まし支能はず。故に物産を開くを以て富國の第一義とす。然るに無學無術なる徒に物産を開くことを求むれば。費多くして功少し。是を以て金石を採るに草木を養ふに塩を煮るに油を搾るに。糸を績に機を織るに。皆人工の上に人智を尽して。費を省き。得る所を殖すの学術有り。是れ即ち重學と化学との二科にして。

此二学ハ百工の利を興すの根本なり。此学術盛に行はるゝときハ其極殆ト造化の功に参するに至らんとす。豈唯國を富し兵を足すのミならんや。

重学とハ西洋名メカニーといふ。一名器械学是なり。化学ハ西洋名ケミー又ハセミーといひて即ち分析学の事なり。各其専門の書に拠て学ぶべし。尚此外。金石学。植物学。動物学。百工製造術等。いづれも其学科に入て学ぶべきなり。

○チヤマントハ天下第一高價の物なる話

チヤマント漢名鑽石。又金剛石といふ。其質透瑩（スキトホリ）多く八面の形に結晶し。其色或ハ水晶の如く。或ハ淡黄（ウスキ）。或ハ褐色（トビイロ）なるも青き黒きも有り。其堅き事萬物に冠たり。之を琢（ミガ）きて稜（カド）を尖（スルド）くなし。柄に嵌（ハ）めたる者。以て水晶をも玻瓈（ビイドロ）をも切るべし。此

物東印度及びアメリカの巴西國(ブラシル)より出づ。其細(こま)かきものハ皆これを以て玻璃(ビイドロ)を切るの料とす。價甚貴し。稍大粒なるものハ琢(みが)きて飾(かざり)とす。其價の高き支本文に云つるが如し。

金剛石の稍大きものハ極めて罕なるが故に。其大なるに随て價愈貴し。大抵重さ一葛力(カラート)より重きものの既に稀なり。

カラートを秤量(ハカリメ)の名。四グレインにして此方の六厘九毛許に当る。

天生の金剛石いまだ琢(みが)かざる者。一葛力(カラート)の價三十フランクより三十六フランク。我通用金四両二分より五両一分二朱許琢(みが)きたるものハ大抵四十八フランク。我七両一分許若し一個の重さ一葛力より重くれば價随て騰貴す。二葛力の者ハ既に百九十二フランク 我九両許 なり

金剛石の最有名なる且高價なるものハ。印度のモゴル國帝所持の品なり。是ハ天文十九年。印度のゴルコンダといふ地にて獲る者なり。重さ二百七十九葛力半。（我十八匁九分許）なりて。大さ雞卵の半ばひとし。是を琢ぎなしし時ハ。九百葛力（六十二匁三分許）なりしと云。或る商人此價を一千百七十二萬三千二百七十八フランク（凡百七十五万八千五百両許）とあり。と定めしなり。モゴル國滅亡の後。

誰ゞ手に落ちしなるや。詳ならず。

オーストリヤ帝の所持の金剛石ハ。重さ百三十九葛力（カラート）及三氏（グレイン）なり。價二百六十万八千三百三十五フランク（三十七万六千二百五十両許）なり。

又オロシヤ帝の宝庫に珎藏する金剛石ハ。大さ鳩の卵の如く。重さ百九十三葛力（十三匁三分許）なり。此金剛石。初めハ印度のエリンガンといふ地に在る婆羅門（ブラマ）宗の寺院の。佛像の眼中に藏（サ）め

あるしをフランス國より印度ゑ遣はし置
ける一人の歩兵。不図悪心を起しく。仏眼を
穿ち取て。何國にもなく亡命(カケオチ)せり。其後或る
船主これを五万フランク(七千五百両許)ゑ買ひ取りて。
ヨーデン國人某に。二十万フランク(四万五千両許)ゑ賣
渡し。此ヨーデン人再びギリシヤ國の一富商ゑ
之を賣て復(又)莫大の利を得たり。終ゑ安永元
年の頃。オロシヤ國の女主カタリナ第二。彼ギリ

シヤの商人よりこれを買取て。現金二百五十万
フランク(三十七万五千両許)を与へ。尚其後此商人一生
涯。年々十萬フランク(一万五千両許)を給しかり。此金
剛石今ゑ至るまでオロシヤ帝の宝物なりと
云ふ

○新銀并ゑアリユミニウムと名くる金属
の説

西洋にて鈕(ボタン)。時計の殼(カハ)。小刀の殼(サヤ)。其外日用

の器を作る。銅鐵を外觀美ならば。錫鉛ハ柔にて損じ易き故に。種〻の調合金屬を用ひて銀の代りとなれり。其方を名けて新銀と云ふ。又アルゼンタンと云ふ。就中其良方を称そうするもの

銅八分　亜鉛（トタン）五分　ニッケル三分　此三味を調合したる者。其色精浄の白銀に及ばざるべし。大抵西洋諸國通用の銀錢に異ならざる。

諸國の銀錢。常方ハ銀十分の一分を合なり。此ニッケルといふ金屬和産未詳。色鋼鉄（ハガネ）の如く。其堅さ鉄に同じく。火に遇へ鉄よりも焠（トケ）がるといへど。銅と合へば坩堝（ルツボ）に入れ焠（トカ）れ難きハ。半やはらく焠解するなり。

アメリカ合衆國。并にペルー國等の錢に。ニッケルと銅を合せるセント錢なり。但し銅の量過多なる故に。色赤を帯びて銀に似ず。

然るに近来そアルミニウムと名くる金属を以
て諸の細貨を造る。其色少しく銀に異なる点
無く。光沢あるも鏽を生ずることなし。又此
アルミニウムに銅を合すれば。其色殆ト純金の如
くなり。亦細貨を造るに適し。元来アル
ミニウムは アルミナの元質にして アルミナは
粘土の純精なるものなり。只粘土のごとき
土類石品の内。アルミナを含むもの甚多し故に

世界中アルミナ有らざるの地無し。只アルミナを
分析して アルミニウムを製するの費少からざる故
なり。方今アルミニウムの價頗る貴し。後世化学家
の発明によりて。容易これを製するに至らば。
萬國共に アルミニウムを用ひて。銅鉄の用半ば
廃するに至るべし。

化学家方今アルミニウムを製するの方。アル
ミナを塩酸に溶して コロールアルミニウム と

KITAZAWA

り物を製し。古名塩酸磐土 扨此コロルアルミニウムとカリウム。或ハナトリウムを合し。坩堝(ルツボ)に入れ焔(トカ)をときハ。アルミニウムおのづから銀色の塊となるなり。只此カリウム或ハナトリウムの價廉なるに依て。アルミニウムを得易からざるのみ。カリウムハ苛(ポツトアス)嘗得沙中の元質。ナトリウムハ蘇(ソーダ)所中の元質なり。